燕石十種

南向茶話

二輯

五

特
イ曽4
679
15

特
679
15

帝國圖書館藏

南向茶話

或日例のごとく二三の友ありつどひ古今の談ふ或人問て曰抑當市地を江戸と号し事何世に始りて中ゝか

答曰仰のごとく近代當所名跡事を紀し書も數あれども江戸の号之事慥あらすゝ愚ゝ管見仕ゝ中古沿革紀十五巻江戸城を創之余下を畢扇谷上杉修理大夫定正之臣を太田備中資清入道乃志と云武州荏原郡太田郷之地頭之子孫男鶴千代丸と云成長後太田源六資持と号を後ゝ頼て任備中守資清髮剃して道灌と称を當山城を康正三年ゝ普請初め縄張して長禄元年閏月迄僅五年ゝ間巧匠の功成就して

帝國圖書館藏

ゝる都五畿ゝ僧万里和尚高詩を引て是地を美ゝる詩ゝ云窓含西嶺千秋雪門繫東吳萬里船又五山より被贈たる詩ゝ内ゝ江戸城高不可攀我公豪気早東関三州富士天辺雪快作青油幕下山と云ゝ右ゝ詩の句も江戸城と有て別号ゝ志ゝ道灌城築の時ゝ地名ゝ依て直ゝ名付たる所

小鎌倉将軍之時代より江戸と以ふ称号の士あり此ハ平氏にて数葉よりして武蔵の士と
称せられハ江戸と云地名ニ在りし愚案ニ江戸ニ重めし言成へし 抑当 御城入之
年中ニ于入国以前今の雉子橋の外より北之方大沼ニて其より西之方ニ在ちの木坂下を
入江ニて有し由小川町も寛永年中外郭ニて昔ハ牛込より此流いとんと橋の向へ
直ニ落ちの木坂の方へ流れ又小石川の流ハ今の本丸三崎稲荷の辺より一ツ橋の堀
此川へ流れ込より有り然ニ唯今御城内古へより江戸と名付所ありて惣名となりし
事ハ其頃此辺の根城なるニより云也類をもって考るニ摂州大坂元ハ石山城と云
享保五年本願寺證如上人始築也 御城内雁木坂本ハ大坂と号せる右の城
を大城と名付られて後惣名となれりと云も此類なるへし 右道灌もとより禅法
を崇敬しける故ニ城内ニ於て一字の庵室を建られ旅僧の宿りとせし某年
庵のまへニ井を掘けるニ土中より吉祥と彫る銭印を堀出せり因ニ其庵を其
吉祥庵と名付られけると著り侍之 云

又同所ニ吉祥・庵 御入国以来当主の地ニ移されし也

吉田吉祥庵の地ハ大道寺氏友山記せし落穂集ニハ只今の二之丸辺ニ有之
ハ愚按ニ内桜田御門を唯今俗ニ桔梗の御門と呼ひ又ハとも古き 御城の事を書
記し書ニ吉祥門と記したるニ先年見たる事ニ右吉祥庵ハ旅僧招請の為
とて建たる所ニて今の内桜田の辺ニて有之歟 扨吉祥庵ハ 御入国以来小石川
水道橋之北の方へ移され吉祥寺と号す 依之古江戸絵図ニハ此橋を吉祥寺橋と
お記しぬ其後明暦年中大火災之時水戸屋敷元ハ此橋の門之内より此
地へ移され其吉祥寺ハ又今の駒込へ移り由右由緒ニ付道灌城築之刻
都五山より贈りし詩文江亭記を掲されし由右ニ書記し堀出し祥銭
も右寺ニ由緒ニ申し江亭記を以て寺ニて一覧にて由ある人ニ申ニ猶
念志ニ任せ天神を神宝ニ江亭記を子細ありて寺ニ納め申事と
承り由緒ある職とも右吉祥寺の一件ハ吉祥寺ニ申伝へ候趣ニて其方ニ
も物語あり

問田唯今の田安の事ニ如何ニ候哉

答曰今の田安門内に田畑天正年中　出入国の刻に皆こ田畑民家ともに此今の牛込市谷町白銀町をこと称し稲荷の森の若年こと称とも伝
ふること也　但此地面田安とゆかりを以て後ふ慥に先年お尋
板橋雲寺まで北条家の古き分限帳を一覧仕候　其中にも田安の号なく上
平川村小平川村斗ありこれ以前右の平川村の中にもかつてその分家田安御門の内
に天樹院様の居館とあり田安門に天樹院様諸人の勤書残られ田安の孫
を仕物語り今の扇の稲荷とゆかりとなる又雑子橋内門内かも民家まで悉御入国第名
扇の稲荷と号しかりとなる又雑子橋内門内かも民家まで悉御入国第名
上られ此今牛込市谷町の辺へ移寛永年中小石川田畑築に後又こ地へ
移られ由を以代町と号ふる事如何に中伝の
問曰田安平川を名を設を得ざる以上と称しに事如何に中伝の
儀ふるしかず
答曰以上を事なるを尚りかるに為れ後徳川家入国に中学剣城番へ

古へ一ヶ所の通寛永年中　橋田辺一図の江戸へ足入地ある由橋川を川流も
ふる田方にて愚按此石江戸へ望める高き地なれば以上と号ふる為ふ駿河
家川を以上武蔵の若川辺以上いまも川を望める地と又小石川水川に神田を
向も田名ハ以上と号ふる出石門ふ望める地ふ此和号ふ伝ふ伝ふ屋敷と号ふ新
問曰番町ふ名目一ヶ方近ふ事由来ふふ
答曰此地ふ新代名付せ　古へ物語ふ出入国ふ始屋ふ古ふ此地を中ふれ
別ふ郷ふ名て勤仕ふふ　ふふ一ヶ方ふの名目ふて番ふ入迄ふ由五番町ふ中ふ
ハ口今ふ斗ふりふハ番町の内へ入ふ由之又波名人の物語ふ云番町の方ふ市谷ふ
ふ坂を三年坂と唱ふふの寛永十二年の廓生来三刻新ふ開ふ坂迄ふ名ふ
道ふ分て思ふ牛込神楽坂より北ふ築ふ出ふ山坂をも三年坂と号ふ因云
ふふ京都ふふ清ふ観音門前より横ふ北へ曲ふ坂をも三年坂と号ふふ清
水ハ大国二年ふ寛永刻国三年ふ迄ふ掛ふふ戒ふふ国ふの清ふ
ふ又稲荷国坂ふ元ふ迄ふ松ふふ出地ふて此ふ吉松田畑ふと云人の名ふ刻ふ国

[illegible]氏の居宅ふ手[illegible]あり西て甲斐国と[illegible]

問曰芝多[illegible]川筋[illegible]織ふ開[illegible]

答曰芝多[illegible]事居住ふ住の者開[illegible]稀ふ[illegible]事近代東海道平塚
章とす仁て編集す不問[illegible]と云の書ふ云江戸新渡を芝と云ハ[illegible]
家の家頃ふ新渡氏あり[illegible]ふ[illegible]ふ芝村新渡氏の居住せ[illegible]又ふ川[illegible]
号或ハ古元[illegible]元下[illegible]川と云り[illegible]細い[illegible]川下ふ[illegible]
四也と[illegible]近代[illegible]人高[illegible]徳元[illegible]五年[illegible]
の紀[illegible]ふ云かの川[illegible]の中ふ橋[illegible]川[illegible]上[illegible]川と
号[illegible]川[illegible]かの川[illegible]
[illegible]の内[illegible]ふ[illegible]
[illegible]代[illegible]
[illegible]

府中より出[illegible]麻布一本松[illegible]四地[illegible]代[illegible]経基[illegible]之府中
居住[illegible]地ハ只今[illegible]経基[illegible]
[illegible]

問曰[illegible]赤坂[illegible]織如何の義[illegible]

答曰赤坂[illegible]号[illegible]義[illegible]古天弾[illegible]貴[illegible]少彦名園韓[illegible]
号ふ古者以古呂故園之名之と[illegible]四地[illegible]愚考ふ赤坂と号赤[illegible]地[illegible]
ハ称[illegible]成下濃[illegible]赤坂[illegible]ふ[illegible]
中赤[illegible]の[illegible]号ふ遊[illegible]或説[illegible]地[illegible]
云[illegible]ふ[illegible]恩田と称[illegible]人[illegible]
之[illegible]ふ先祖遊[illegible]源氏[illegible]赤流[illegible]地ふ居住[illegible]恩田を称号[illegible]北条
家[illegible]
橋[illegible]
[illegible]

問曰四ッ谷[illegible]織田[illegible]民家の家[illegible]三[illegible]四ッ谷[illegible]
[illegible]例ふ[illegible]民家[illegible]時の号[illegible]

答曰御の通り我等も左様に存じ候処此度彼地に久しく居住せし老人の物語に
されば古来此地今の稲町宅町の内は此処谷あり又今の塩町の西も谷にて坂あ
りしが後に民家一軒ありて其後居住せし故に俗に其坂と唱へし也寛永十三
年に郭出来て此処堀を以て埋めし故平地となり谷なき地と云へども旧
名残り塩町の入口を坂口と小名に唱へしは此故なりと云此地東西南北ともに谷を廻らし四
谷と号す此処未の忍町と号せる者の所の当の方は先年細屋敷辺を忍原と号
せる事此処仁和結に有りし此處は先年細先細天正十八年御入国之劃駿府
より来越出の山間の城番を兵部慶長五年人武州忍城の城番を命じられ
寛永十年忍城を松平伊豆守信綱に下され其当地へ来此居住せし故に忍原
と號し小名を忍原と号し候也

問曰牛込小日向筋に御開有る事如何

答曰此地も数年居住候也幼年より承伝此處有りし先牛込名目は
風に在りて古へ一月の名と称して当地は往古曠野の地なれば駒込

馬込目黒何れも牧之名にて込は和字にて多く集まる意之由白山の名菊岡沾涼
之江戸砂子並続出でたり其の中に山田氏北条家の陣帳の内にも小日向弥三郎と申士有り
是は彼今の領地也と唱へしと之沾涼は字菊岡と申し市も知人にて篤実なる老人にて
此砂子編集も八年之間江戸中往来致し聞きて諸家の古記致し纂候
甚遠く之を聞きて又後編を古記を見るによって当所の地名の説あるは彼
書に有りて菊岡之功夫ありと以て牛込御殿山と称せる地
は今薬戸の後桜宗万昌院と号せる之地あり此寺は市谷長園寺
境内にて明暦年中火災に付て二之火消役御用地となりて其の今
北丸内坂火消屋敷之地と成り今に此処町家を御殿山と
唱へ候也御殿山は寛永之頃御鷹野の則御旅屋ありしと之
小日向辺此辺は田畑にて安藤対馬守屋敷となり此山を崩し築
也今に築地と号し御殿の跡も残り候之
又八幡之地は往古上杉時代之寨之跡にて城之を以て

伝ふ此城を市の幼年に割或古老の物語を別幼年ハ番に家を遣ハ慣り四
古神樂坂に若宮八幡も此宮を営まりと云て築戸の称ハ諸説ふ古くハ通世
古平川村ふ之を牛込御門と変遷世あり て寛永年ふ外郭を築別今の更
又も遷世あり盛古老に流ふ築戸元ハ次戸と書を法ハ江戸の称を御城内の
称なる由仕と況と宮を祭をきり(いつも)つまの比ふ誤まりと云ふ若し比ハ築戸
の称に堂上方の筆を額もるに如ふ迄比築ふと書ふ古老に流を
市もあるハ市ふ風を記武蔵国豊島郡に江戸或ハ薩大宝二年壬寅所条素
書篇に云と云ふ流記十五巻江戸城築之条に載之津久戸大の称ハ北川と同
称に由ふ素豊島に云ふ志れハ樹に拾ふ河に比碧に志記て後哲を待つも
問曰寛永年ふ外郭を築ふも市谷より小石川の方も川流を此ハ築戸
曰下より流ハ川筋を法ハ川と名付られ(ども)古来ハ樹に由ふ此ハ大川
御もまてふ
若曰此事に疑ふ市谷を仕居せ人ふ此ハ郭外を築ふ

今五間長巾通ふ小流を長慶ち谷之内大沼に流ふ合流を由
此水筋を由地の用水ふ仕曰所に多ハ皆に田地也唯今扶持町と称ふ如
元名ハ船河原と市ハ由仍るどんと称ハ俗の名を市名ハ船河原と云由ふ俗を
あ者ふ此今ふ市屋ち谷の内安藤氏屋敷後辺沿の跡ふ残を之説ふ右船
河原ハ此今の大坂の下一流を坂と云 あ て由て今ふ此所ふ斗を町を船河原と唱
ひ此ハ人を別由て ハ民家ち流まるふ多ふ郭外を別民家ハ町家
と成ち流ハ此今の牛込横町辺 稱ふ此ち流七ち之ハ左ふ今を七郭ち町と唱ひ
曰此地の ち流の四流を扱牛込門市ケ谷門外郭出来以後俗を市谷を横門
牛込を紀来に出門と称ふ由是ハ之の来るを之ハ樹を俗を呼ふ又ハ俗を
子細も ハ半ふ子ハ ハ義俗 市ハ
問曰右横町を多大友屋敷ハ大友氏族居住ふ由子性来来
古人ふ之を居住 慣あ
若曰此事に通大友氏を性来ふ市も子孫を永久ふ由子孫を法を大友

左衛門督義統の孫年中朝鮮征伐の急なりしに頼忠浮田毛利家と預て
後又改て常陸介佐竹義宣に預給ひて幸せしる義統に嫡子宮内少輔義延は関
ヶ原に預り山内に流せしに慶長五年関ヶ原の乱に義延は叙位任官世に豊後を小倉
流と称し今に慶長五年関ヶ原の乱に豊後の筑後に新合三千石要
地を幸頂地せしに今に至て其地を右衛門の地今の浦松町あり
と云り天神町と称せる所は大宰府造営に使れしの天神今の社と云国馬場
所今遷宮あり大橋北に在る古城跡三ヶ所あり御面今ふる国名之
松ハ屋敷と云あれ天神町に辺所跡に成り元ハ大本町と号せる田
或説に扇町成り加之大宰府天神の門前民屋を扇町と号せる名ふ大安寺
今に称ふ後に名付られしと云大宰府一覽に人尋ねるとは
同国高馬場と云古戦場に由是後に源義経角田川に合戦猶利勝く
山地ふ屯せしの雲霞を集められしも云後の如の様なるとは
蒼田高田辺古戦場に成今の禅英宗泉寺を所にして由中

後村上天皇七年新田家信濃宮を信濃に武蔵野の合戦あり
君臣代の為何の惜しむん捨てもひあるべ命ありせば
と歌の御しさを給ひ〜〜やて陣所に今の武城に乾徳山法泉寺の古跡あり
人天皇信家説指の法泉寺と云国宗八幡宮の別当と云信濃家八坂磯城
帝の三之宮と宗也新田に禅英宗泉寺城〜乾徳山法泉寺に大窪で
先キ中世に成る田とハ城遠〜所に右之通り田説も中絶に所に成
又家系の田説ふ世に富塚と云所あり富塚村と云名
今八戸塚村と号を上杉治新左衛門尉興せしを建られ移所を勧請せられ
由疑らくハ禅英宗泉寺ハ乾興の近所と云後の又右大将家内之陣と事山尋
る新田義貞の隅田川一戦後高田東〜方ハ地名多ハ此地ふ山之陣も迫
と云中世に牛込と云牛頭ふ行元寺に新寺の縁起も新寺に山所於佛

を隔て川一戦を後此地に安置奉るの路ふと中絶へしより

問曰宮八幡宮地も古来より古戦場にして

答曰宮八幡宮社勅願寺事元亨年中僧公儀建立し此地元早稲田村に因り

中島と小名唱ひしを寛文年中青柳律宣卿富士農民に命じ元八北条氏

仕官士と唱ひ者の拝領して地に杉樹を繁らし地に一本を杉時敬

公より光りあるを以て杉を光杉と名付し由然る宮小田中村に比的

地を築ひて一宇の宮を建立し御神体を造り七体宮内時代人に陸奥人を

御祭祀を勤て今に伝へ金像佛一軀陸奥を以て陸奥の字彫刻を

て因又白き事なるなり中ふて洗病の病に用ふ効験人

々之求て因右青柳律の来て者物にて也を須　岩を虎様に誕

生所此社を内宮と名付し由又説に御廟所と別に宮新に出来此

社を造営し隆盛なるも後年絶ようなりて年到　大樹に迎西名蓮

位に預る事門人因義豊寄も義隆公の時代に地増に長

数に補と云り又此地の古蹟の説に八幡の辺より南尾の山麓大窪五一通

江戸道に因昌連と中富に農民にて百人を塚を築ひて塚に八幡宮地

を強大窪にて云右昌連と中人俗記に塚に仏供中の名

ふ築ひると之今に尾の山麓内に塚ひ築ふ塚に塚に

築ひ塚ひ築ひ八幡宮地も陸奥因と名ひ

問曰宮田宮来より西へ通り橋を宮元橋と也又面新橋と中田銀

答曰宮も此不分名称也古蹟に

宮元此里に稲荷敷に佐竹橋と称ふ男子二人を殺祐記と女一人を姫と唱ふ

容色絶く為に婚礼を求ひ人為に成に人為に成に父母祐事為て他国に

うりし此迷を辺に通ふ関と云者後を繋て他家を繋て他の為に男子兄

弟絶を討る事を儒ふ関奥へ入於て姫を奪て逃去る板橋に姫縊し

て人心あらに彼所に打捨て実に逃去し板橋に於ふ三筋に分て云者に

夫婦老人ノ耕作ノ業ヲ以テ野ニ出ル女ヲ伴ヒ家ニ育ル程ニ好
ク思ヒ通ハシ居ル次第ナリシカ其ノ頃ハ彼山川ノ婚
セントスルヲ村上三郎武範トイヘル士族ノ娘ヲ求ル事再三ナリ是ハ彼山川ノ婚
ヲ聞タリ山川ノ家ニ切ニ懇願シ遂ニ其ノ娘ヲ奪ハンと
村ノ者ヲ頼ミ迎ヒトリテ村ノ者ヲ討
留ル妻女懲ニ堪ヘカネ髮切ル時ハ彼ノ者ヲ出テ去ヌ山川迎ヒ取リテ
書リヌル深ク思ヒ入リ切ル時ハ彼ノ者ヲ殺ス恨
と称シ自ヲ又用ノ切ル所ヲ
限リ山ニハ用ヒ今ニ有ハ出ル切ル時ハ人ノ今ニ有キ世ニ
手段ヲ行フ分ヲ投ル事ハ有ノ孫ノ織ノ有テ好人ノ濃ノ橋ト名ヲ
云ヒ家ニ民ヲ集テ里張ル有ノ紀ノ性名ハ覚ヘ他ニ有ヒ人ノ信用ノ
ヒ人ノ少ク暫ク手段ヲ義ヲ為ル事ヲ因馬物西ノ法ノ社ノ別
手國ヲ以ヒ寺僧ノ法ハ高ク伴ノ橋ハ徒ニ左ノ業ヲ弱ク居ル事ハ小西ノ

此ノ橋ノ孫ハ平志ヲ知リ法ノ名ヲ知ル事ヲ能ク
少ク三世ノ仏三千仏ヲ為ル事ハ小西ノ無ク紀ヲ知ル
云ヒ右ノ孫ハ所ノ田地ヲ知ル此ノ法ノ名ヲ知ル
問難ノ答田地ノ由ヲ伺ヒ
答曰法ノ名田地ノ由紀ノ医術行業ノ古紀ノ伝ヲ答ヒ記ス利
元ノ名ハ覚ヘ書ノ名ヲ忘ヒ紀ヲ法ノ名ヲ知ル知ル国ノ
ノ鬼子母神ハ中古ノ御伝ヲ説ル鬼子母神ノ縁
ハ只今ノ法ノ鬼子母神ノ名ハ中程ノ方ノ畑ノ中ニ農民耕作
ノ所ノ地出ル只今ノ別当大ノ説ノ祠ノ西ノ只今ノ堂ヲ東ノ所ニ有リ小
堂ヲ建テ安置シ又ハ牛迎ノ三ノ名ヲ有ル学堂ヲ建立セリ
手柄ノ姓名ヲ記ス人ノ元孫ノ始ノ法ノ只今ノ所ノ柳ノ堂ヲ建立ル
西ノ方ノ外ニ只今ノ右地出ル地ニ大ノ説ノ伝ヲ一ノ一説ノ説ノ史
ヲ焼ノ下ル迎ノ柳小ノ外ニセイトウと云ノ小名ノ有ル字知ル人ノ相変

天書ハ又法隆寺ニ四の陸の下ニ写ス外斗ニ十五路盤を陸角ニ写ス
おもふに何程不詳ニ陸ハ伝ハ写ス

岡田小名川四名ニ由四紀ハ
昔岡小名川ニ看四紀ハ
小名川ニ渡ル事ハ無ク然ルニ四紀ハ実ニ有ラヌ様ニ家紙ニ四紀ハ名ニ有
ル事ニ疑フ所ハ有ル事ハ無ク地震ニハ南ハ小名川ハ
門堀ニ写ス北ハ大堀の大道ニ至ル小名川と号ス牛迎ニ至ル上水ニ沿ヒ牛天神
下ニ至ル小名川ニ因ル也今ハ新橋と称ス前ハ有リ旧名ハ迎金谷村と云
ル事ハ古河公方の家臣豊島ハ城ハ仁居住の所ニ因テ豊島ハ城ハ所ル
地の東ハ今の新坂俗ニ今井坂と云ル事ハ上ル事ハ金剛寺坂ハ旧名小名川
寺通町と唱ル事ハ明暦年中出来ハ出来ル起リと第ハ又上水道橋
ハ八幡神の小社ハ牛天神ニ別当龍門寺ニ於ル建久年中之石碑ハ
ハ旧古ヨリの神社と称ハ碑を尋一覧ハ

俗ハ孩

岡田丸ハ菓鳴ニ名目如何ニ
昔岡丸ハ東由ニ写ル俗ハ此ニ初ハ東坂ハ所ル大木ニ梨木ハ由
戸田義睡ハ地ハ居住ハ梨ハ称ル事ハ菊坂ハ
菊作ル
畑ハ有ル事ハ無ク坂ハ新墾の形ハ似ル也ハ俗ハ当
坂の縁元ハ菊坂ハ細ハ元禄ニ比命ル戸板を捕ハ殺ル所
ニ捕ル事ハ坂中ハ小屋ハ多ク出ル重ル後ハ重ル事ハ
千刈世話ハ菊坂と唱ハ由海ハ富坂ハ路ル事ハ義稿集ハ載ル富
沢町ニ縁と因ル事ハ是ハ又極楽寺橋ハ戸町ハ東ハ方ハ鶴橋と唱ル小名
ハ或古老ハ物語ハ元禄年中ハ出来ル田畑ハ鶴ハ来数日留リ居ル事
ハ鶴ハ新橋ハ教ハ鶴ハ由ハ其ハ故ハ
民ハ行ハ鶴の留リ居ハ内ハ番山ハ丹頂ハ出ル由ハ今ハ
ハ鶴橋と唱ハ由ハ極ル右ハ将軍ハ治世ハ五名ハ餌年ハ

軍按
橋戸町橋ハ南方
東側町屋ノ裏ヲ今モ
御鶴場ト云

いはゆる鶴齢千歳も空とそあらさるなり又巣鴨の号の事風土記に見
えたれとも此地はそれ程北東部にあらす限界はおのおの異なり又大塚を
事情既にしるしたる武州比企郡も内大塚村と又
云う由未詳鎮西将軍宇都宮氏の
ふ大塚と称する由は新しき方にて大塚より巣鴨に至る間の小河ふを
又ふ橋を猫又橋と称ふ伝へは此地農民の説ふに昔は今の流れ細くして
田畑の面影なくして水の根ずまを以て橋ふ流しに成りと云ふ
根ずまを根ずまと唱ふ

問曰 本郷駕籠名ふ所但湯島の如くに或説ふ駿河の産出
ふるそしい稲荷ものと太田稲荷と名ふ太田氏の塞跡なるもの歟
答曰は尋ね通ずるの名目北条氏限界も載せ又治乱記も出たる湯島の
風土記に載せたる歟ふ云て湯島の如くにて稲荷の後方に塞と後府ふ者但治乱記に太田新六郎と宅地をこそ
塞と武州岩付城の後方にあるとなれはこの稲荷の辺も太田宅とは

問曰 上野の谷辺思ふ岡等ふ御岡及も小名
答曰 上野の号本名にて谷の辺思ふ岡ふ御岡ふ
と唱へ不忍とも云ふ谷の風土記も小谷の岡ふ
名所なる事なり不忍の岡と称する由ふ忍の池の南之方七井戸と伝へ由緒
記ふるし神武別宮実盛古墳の跡是今の湯島天神之下芳枝氏と宅地と雲
ふ所の岡辺此地移転ふ者て紛失しに由て情事と長者町と後補説ふ載
さしまの服一柳氏の宅地と池ありて長者池と唱へ来れり此事跡なん
問曰 湯島名と後藤の説ありしなん
答曰 湯島の名所記ふ載たる事を茅町尾町氏と称昔ふ尾
町にて尾を作りは茅町は茅の麦買を成しけるとなり尾ハ子塚と茅場町
古茅高麦之所と無後世暦年中以後也茅市橋図ふ橋ふ子塚名称
始此ふ是今の本所四ツ目と橋ふ是は茅問屋数代麦買ふ者の地名なり

坊となし織此地を古き物語には多く此所に橋有故に橋場と号しけると云義
く千載集等にも見へ今隅田川渡舟まてのものより川上壱丁計と云古の橋杭
残りありし節 往来の船筏なとのさはりとなりし也 神明社ありて石浜神明と云古来の名は
石浜といひし由右之橋何比の頃か難所なりし故又説に此所往古砂尾修理太夫を
いふ人ありて吉田道清と合戦あり石浜の戦と云し由砂尾建立せし寺ありて天台
宗にて砂尾山不動院橋場寺と号し小院あり又此地法源寺とて砂尾
委く記せりとも後世に至り寺号に及へへくなし由にて何ひしに答曰実成といふ石
碑此寺に築きし事は往古其時代之住持実成といふ一族ありし由かも書き出して
其碑を文字見るへくし漸く見へ書に四辻家の姓名三人と有住実名何まとも慥に
難見分論ありし由来も知れさりし 又古老之説に橋場小宮の小溝を鏡洗川
と唱へ 鎌倉右大将家隅田川合戦之刻馬を洗ひし所の由其合戦之首塚は只今
総泉寺境畑此中に有る由俗に謂りて蛇塚と唱へ由之委く北条記にも此地に
暫く止宿せられし事跡有之也今按ずるに是等の所なし

問曰本庄と本所とも書しはいつれか正字ならん梅若の来由に付て旧地と申
は如何の由聞つてたも此寄

答曰本庄は旧名なるよし 武州熊谷の舎も同名あり元禄年中有故て本所と書改しと
云 梅若跡之儀近年庵主人縁起書記しける其比には上古圓融院之御治世之事跡として
書記ともも愚按に是利家之時代乱治之此之事跡なる近比猿楽傳として謡の来由并
四宮左宰文室綴を書記しる事をも伝へ其因に其東御天皇之後武蔵之謡神
解しる者梅若事跡隅田川の謡を作らせらる其比に其頭の謡人ありて梅若の事
始を描き出して書記すことあれは久しき事也ならんへし 文明の頃之五山僧横川
史景三の詩集にも梅若童子悼とて詩あれは其此の事にや 将又当所業平天神
の事諸記に是説多し 愚按に伊勢物語にありて業平之神を祀る地成る塚
の名に加へてなされり 武州川越の城内にも業平の神を祀りといふこれも入間の里
に在ぬの由は業平此地の人之物語に川越之神縁は未定なる由是とも之神縁も
委く尋る事也

同国王子村之脇に谷村と申處ありて細道の有を鎌倉海道と申傳へ候
直ニ当所の往来筋之由申候ゆへ何連と申候
豊島郷の内なる事も兼て此處谷村と傳へ申候村細道も鎌倉海道と謂へ候歟と
存候處ニ古老之説に当所東之方池沼多くして是今地形ニ往古の道筋ハ今（此地今ニ処のニ有て鎌倉道と唱ふ）
の青山百人町之西之方ニ宿と申處を経て千駄ヶ谷八幡の前
大窪へ通り高田馬場ヶ雑司ヶ谷法明寺後通り護国寺後通り只今の中山道の道
を横切谷村瀧野川村を経て豊島村より千住の方へ古の道筋之よしなり右物語を
按ずるに右之道筋三ヶ所ともに旧名残り此之を考へ慥成事にも候を只今青山百
人町ヶ直ニ有り此小田原之往来道を信ずる中道と唱ひ東海道より二里近く旧本
橋より小田原迄十八里のよし也又豊島村ニ往古豊島左衛門と云士有りと云阿弥陀
縁起も見へて有り治乱記にも豊島左衛門尉と申士上杉家領分へ仕へ近隣と合戦有り
しるし見へて有り按るに此豊島村ハ元此所ニて居城有りし　又此近所堀田村に梶原塚
有り其前年を刻此處を過ぐに於き本堂有りて古き石碑有り也後年数

寄者突ニ沼ニ有り候處村民文平の石碑を建路傍に有るに文字磨失して有る由
今は荒川の端畑之中にありて右地続き有る按ずるに此梶原ハ鎌倉時代之幾に有る之人か
又は中古太田の一族梶原美濃守なるか或ハ北条家家臣梶原何某と云人
見へて有り此の一族なるか此地之古老之物語に此塚之處ハ昔寺有りし處に而へ
出地穴入候て地様有りしハ敗壊仕候由之且又此處元本村之内に熊野権現之社有
り社司ハ鈴木氏なり旧説に以て此神社縁起より古様されし候　別に縁起も記
おより来ける事葉なる由今の王子権現と同じく古様され候よしとて此村
之内ニ寺有り其寺ニ古く伝へ来る本縁並ニ本堂の形有りし由昔此處の領主
並ニ其名ニ委く記し伝りし所なる伝書自火有りて悉く焼失しける由て
惜事なりと存て當所ニ其頃ハ右の熊野と同所にして後に当所と称ひ候
あるを其名を誌と存候由ニ候

同国武蔵国　信ニ二十四郡と申候へ共只今ニ廿二郡なるニ付此織の字
及も難存

葛田郷の西なりけり当国廿二郡あつて其之内を廿四郡と唱ひけるハ二十余郡之縁を
廿四郡と謂へりと云侍る既に葛西郡之内中古迄は江戸之府に近比武州
ふおき此所廿四郡之事は詳ならす館ハ有之其頃葛飾郡之名目古
書にも上古葛飾人五百人帰化せり故其人々を武蔵郡に居住せしめられたる所に葛飾
と郡を名つけ此郡人之物語に前より続き葛飾之郡と号す彼国かれ
江府の兵器を始め神宝を奉る由其後は文武芸能之伊勢物語のおもむきに
此等の続き此所上古縁之製造ハ古方へ古縁き中華之器の製造に似たり当国より
是を古用ひし器を製作出せり其頃に至りても古よりひ来る者有りと云ふ其器
製作之工人代々伝り近代冑を製作せし早乙女と申たるも此末葉にて此由
近き頃まても千住宿に其子孫の末葉ありしと古老之物語之説に紫円
寺に参りて尋極め事に云侍り

茅屋向陽故名亭

寛延四年辛未二月初午日

此一帖渺名自雄所蔵也松本雁奴家

山田屋半右衛門
住所元飯田町

借得口占筆令書写遂一校畢

寛政二年庚戌仲冬三日

杏花園

南向茶話追考

往年尚府古跡の事を考ふ紀行ぬ年を〳〵て右志すぬ
事ゆゑ多れ多数を考へ〳〵歩しらるを尋ぬ墨せを益
て追考をあを先篇ふ合て之結ん事を希ふのを

○萬里和尚之詩

杜詩絶句ニ有之杜子美罵成郡草堂作四首の内

西箇黄鸝鳴翠柳一行白鷺上青天窓含西嶺千秋雪門泊東吳萬里船

○江亭記

相州鎌倉荏柄天神宝物鎌倉志ニ所記文如左

但江亭記文別巻ふのを

右江亭記詩之作者補庵景三撰セシ百人一首ニ載之太田左金吾〳〵贈ル

詩文如左

凡古之人無老無少文武礼樂之暇搆休息之居樂各自得

之道千今源太夫公卿遊觀爲騷人墨客之會知尽臺之上出景
家遊目无隙不如九華山有仙洞前臺后臺相去及数百歩松風度
曲无然之有調茶烟輕颺彰山舍隱常陽之羊如石固而似彼仙駕
華山落雁傳信於芦花淺水邉鳴呼春花客秋實賓染心瞻於
詩歌者可木呂評矣故側儲茶竈作四時之會所謂茶瑞草魁又
云相不在千盃酒一盞文清茶亦醉人焉高用常易鳳嶺久广聊
鐘此産吹鳳嶺之二字依掛一首云〻
弥重仙苗日月長迎秋爽氣一襟涼　緑茅暁洒金莖露天下
看從鳳嶺香

又

悼道潅生涯三年忌之時　横川叟景三

東遊雖遠任君招寃血無瑞洒九霄昔枕三年哉夢見風吹
不破却芭蕉

○攝州大坂城旧名石山
三好記享禄五年居山科之本願寺證如上人を殺せしを給ひ上人恩あり攝州
ゆ石ゆへ中向ひ下男
天文二年然ルニ堺ヨリ切手門徒ヲ大初メこもりをる所を九月細川晴元責ルを
門徒モノキノキハ合戰ニかけレ共不叶ヲ堺ヲ落チ石ゆへ引籠ル同年五月ヨリ石
山ノ城ヲ責ラル、城ハ攝州茅一ノ名城ナリト男
○岩川安房殿所と云ふ切ヲ丹内開ル者へ勒當の与力同心居後ろ回名ハ吹
上と云ふ中北条安房ヲ切ヲ丹内ヲ後ろ伐ル　伊賀山ノ与力
同心ヲ配ル　安房ヲ組屋小名と呼ひ来りしゆえ
○二年坂号虎の口門の内（旧名虎口門　伊門）山王ノ通りの西今俗ふさ（栄螺）元屋と中ヲ西の小坂
をも二年坂と唱ひも先書ふ又ゑる道あるゝん
○芝の称号は事始の古元云芝と云ふ元山辺の地名を芝浦と云ふ細い海岸
近き来ふ木の小枝を切ら〻ゑて海苔を取りはを引木の小枝を俗ふ芝と云ふ

此浦布ごとく海苔を産ひ出す故名を芝浦と唱ひ来るといふ

○府中六所宮王は経基の事 延年中も 六所明神ハ武蔵の判官経基の事と
明神の御神事の流鏑馬の馬場を其側に建し宗を稲荷なと云ふ 経基を号を経
基山と号を伝ふ云 此度当国任られ内其居住し給ひし旧地なりし故ハ此所を
と号しける由也

○かふらひはしの事 或古老の説に此所旧名ハ西府宮村といふ所にて西府宮の橋
とぞいひよし也

○大友の松 大友家の伝説に云 宗五郎義延旅館ハ今の浄松寺此所にて大友やし
きと号し大なる松ありけるを後にちて藤原の浄松寺と号せられけるも此故と
云伝今細屋敷の内の松ハ大友の家ハ東へ往ひ来る吉良領主ハ深栖七左衛門なり右
吉良領主ハ営作せる新家屋の樹之領主ハ関東一乱の 義続へ使を遣越し館に
置く正なる又深栖七左衛門ハ義延へ従ひ 又君召無く後て子孫酒井讃岐守家臣に
宮合して出葉今にて此宮にあり又此地要の当時此村細屋敷の内稲荷も勧

請ハ大友のせられし由是にて云る大友のいみりと号しける由也

○梶原堀田村梶原塚の事 此地の名を梶原と申者ありし故の由にて梶原塚ハ古来寺
ありしにせし寺と云ふ寺ありけるを川へ欠いりて地形狭くて没しぬ後に寺号を他へ移
して今の谷中に移し置しける由也

○そしれ本坂今等々に此坂の上中程にて七左衛門屋敷裏にとしれ大木有りし故
小川町通りよりもそ見へたりと伝て言ふなり

○諏訪大明神お当鎮他の云国ちゝいふ 由緒一帳に委しく記す 縁記如左當
諏訪大明神ハ往昔の時よりこの地に鎮座し給ふといふ事を志る由なるに人皇五十四
代仁明天皇此御宇承和年中在原業平卿当流浪の時妻妾道に失ひ一夜
此森に宿を隔て寝し給ふ夜妻ハ夫を思ひ夫ハ妻を恋へ恋なしみ余りに詠み
を移して一首を詠む歌に云

何となくけふこそ此宿屋の弥々捨きこそきくやうとかき

と思ふなく詠む時に感応のしるきも夢のことく夫婦もろともに総の思ひ

を守く志るしより以来当山に帷の森意のとりと以事の秘密の霊地なり宗に任
せ八十二代後鳥羽院の御宇文治五年此ま源頼朝公逆徒退治の為に奥州へ
発向の砌当山に御追罰之御祈念をなし悪徒退治の御願をなし給ひて歟
をなさる之子孫社頭御造営あり又当代へ至り百九代後光尾院御感ありて
今御祈願を御当所にあり是れ神仏の霊験の威光なるんと云ふ
武州江戸大久保諏訪の当山地に当國寺　右は別当より余語神拝神影業
平塚も御当所のようまて新く見えるる三千佛の像の顕まるとて像取あり境内に思
の森立の古松を川を隔て杉大木二本あり村老の説に龍池山と号する事古は大寺にて
境内広く東の方唯今尾州豊島屋敷内より流水寺内へ入北の方ま屋氏の屋敷
を通りて大きなる池ありて龍池山と号せしよし今に寺内に小川の流あり
又溜りの橋北に薬師堂あり当山は古宗にて大鏡山東龍院と以ふ一回説有
古此寺の名昔大なる池あり鏡池と以ふ左に別此寺の山号を大鏡と号しけると
以鏡ヶ池の名にまけしを溜之とハ名付けるよしなり

○僧司谷号紀ハ醫師立野喜節著述
二蒙集　鎌倉口號ト江府雑詠と合て二蒙集と号
寛文五乙巳冬十一月梓行
江城之西北ニ村有曰僧司谷　下略
○鬼子母神勧請の一説あり

覃按瑞璃山福蔵寺ノ東
鴨本村ニ有十羅刹女ノ
宮アリ大ナル銀杏ノ木
二本アリ右ノ鳥居有
鬼子母神ヲ集取テ十
羅刹女ラノコセシナルヘシ

只今大塚より小板橋へ行道巣鴨村むらと以ふ東道より左側に古義瑠璃山
福蔵寺と以ふ寺あり鬼子母神の社ありて村民信仰せり然るに此寺の旧地に溜
ありて此寺へ志のび入鬼子母神の像并ニ雑物を盗み只今の尊像出現なりし事の
畠中みて雑物をみな像をハ此所に捨て去りたる九村民重右衛門が昔右山
と以ふ三人中院し法明寺此寺内東陽坊へ持参しまると之東陽坊ハ今大行院
と改以よし又境内に千部仏堂あり其堂札ニ書記如左
△此御堂嵯峨天皇御宇飛弾工建し堂之弘仁九戊戌年当山之住僧白源上
人祖師日蓮を崇敬し宗を弘める宗祖の尊像を此ちに安置し奉く

又升秤曲尺ヲ造の銘ふ曰
寛永廿二甲申十二月武州豊島郡雑司谷威光山法明寺十一世遵成院日延鉦
鑄之及破損今亦廿四世本量院日達代新奉鑄之者也時享保十七壬子歳
十一月吉日
隨順院法圓日悟居士爲菩提　俗名水野頼母源信久
江戸神田鍋町鑄物師太田駿河守
久兵衛藤原正義

○牛込上水端道祖之石碑建久年中ニハあらん牛天祢別尚天台宗泉松山
龍門寺ふまき板石ふ勧請の碑とそ所ろ左の如し
道
明徳二年十二月十九日　考ふ明徳二年辛未ヨリ今明和二乙酉
○○　年ニ至リ凡三百七十五年

右の銘ふ道の一字左の脇ふ二字程の沼ありて消て字ふしるしなし又天祢
勧請の石碑所り銘ふ
延文六年辛丑二月日
左右ニ梵字ニ字所り
考ふ延文六年辛丑改康元ヨリ今明和二年乙酉ふ至リて四百五十八年天
神祢社旧説ハ辺往古ハ入江にて右天神新勧ハ社ハ宮ふ社を宮ふ少夢ふ
のありて勧請ありと云ふ別ふ鎌ふ知ふ石ハ裏門の外西り坂下
水戸道　牛石と称ふ古社ハ是より東ふ当ふ祢木松一株あり新繁松と
称ふ　右ふ船を繋ふ所ふ当ふ水戸侯の領ふ成ふ故ふ右の
旧社の跡ふ移ふの社を建ふ所ふ西ふ旦ハ社裏門の外の坂を細ヶ坂と
唱ふ　も入江の節の四方のよふ山麓ふ流所流所社ふ中古ハ古の俗称ふ
中古ハ古の俗称ふ流所流所の社ふて是ふ魚常之仏ふ
由ふ西ふ東流道祖神の建久年中の石碑ふ是ふ今ハ無之ふ

○大塚の事は東安房郡馬乗の方森川山麓の西南に塚有て古の大塚
ありと申伝へ侍るなり
○東京中の人業平天狗近年開発の刻掘て辨ずる遠方にて
発掘の時分尋常業平の骨格の様なる容貌世間の人新奇の思ひ緑深
云元慶年中在五中将の御墓なりと申伝ふ切り取り武蔵国入谷
郷之芳野の里に伝新求めんとて五百崎浦舟道遥〻沙汰
生いたち五百崎浦の海の中にいさとりん沙の音えもを
お尚元八立泉寺と号し〻る今八南部院と改む又業平朝臣の子位
ありし九里人とも中将とといひしを男信濃守中の人と比なる
故に此の村の村史なり侍る
○豊島村熊野権現の事
尚附八紀州大日神と称し尚村の鎮守なり神社八除本伊勢と云相州村に清光寺と
立生いく云宗寺あり古侍の云むし〻豊島清光の建立せし〻ふりて清光ちと
号せるよし元八豊島代〻菩提寺なり元祖康敦清光の木冠像も有りしに
先年自火にて焼失し〻なり清光の塚の杉とて大木の杉一株有て古民豊島の
大杉と称する〻只今樹枯の社九の方に康敦の社清光の社と南宮社あり又此村
の名尾大原の名尾と云ハ荒井氏と先祖部の産にて豊島氏の家臣と申
侍る 考るに康敦清光共人何世の比の人なるや
寛延元年庚辰十月二日辛巳武衛相乗に常胤廣常等也舟揖浦大
井隅田西川精兵及三浦義澄武蔵国豊島権頭清光等西三郎清重
あと等上ス下男と有是若し清光か
○医王山清光寺 古義 沿田村常光寺 古義 二書目
○梅塚石塔神社八古来より鎮清あり大田地の中に昔の首塚を設
まりて地塚と称し行るを神社の社田なれ〻る西き比弁才天
武州石塔千葉家を考

強盗大学の残党氏のかき、の系図二方ふるれ宮方軍方と分りしう
宮方ハ九州へ下り之後絶ふ下総へ移り之後絶ふ下総へ移り之後絶ふ
加ハ成氏公と一味して京越後ふ流浪同流後世流義行まで流の
て千葉へ移り之系の弱を絶ふ流義の出家あり是を立て
流面と千葉介の道常陽のなり一族ふ中務入道常心の息実胤自胤を立て弱の市川
の城ふ楯籠て流の系又二流とある因て七月廿六日攻落て年号を康正元年
年と改む家ふ千氏公方の道后東小野を常陸と分り是を昔の常胤
の子男東を市東実胤新の嫡流あり弱ハ知ら代公方の道
后親人て立家分り今度の系図西流ふ分て弱ハ大乱れハ為系下り
一家の繁を絶し馬加陸奥を今退治実胤を千葉へ移り市田此ハ知
を業御新書を常しハ向を中男康正二年正月十九日孫ふ城を攻落
実胤ハ新御と称を武ハ石濱へ移る
私ハ東人ハ中務入道常心の息千葉介入道常瑞事ハ太平記ニ見ル新田義貞ともに
北ハ下ると業介実胤ハ弱より五代の孫なり

又千葉介孝胤ハ先年父陸奥守入道常輝を伴し
新出ふ捷ふ此陸奥ふ入道常輝ハ故千葉介次男ふて馬加ふ居住ス
馬加と称を

故常直兄弟ふ腹ふ成氏へ家公人ふて成氏より千葉一跡を賜ふ千葉流
直此一跡ふして実胤千葉介ふ任し上杉より小総へ居を立と云とも成氏より者胤
をひいきして千葉へ居られ千葉実胤ハ千葉へ入部を不許して武州石濱菖蒲
を知行して時を待て居りしふ世の中を述懐して遁世して濃州ふ上りて閑居を
此人の真胤を上杉より取立て実胤の弱を賜ふ千葉ふ住し武州の千葉と称
を〈東記記二巻ニ見ル〉結城ハ関宿城攻の系ふ此城攻の時武州石濱の城ふ
業沢郎討死ハ結城の業の庶流故ふて武州ニ住す首を関宿ふ送る因出五之系図男ふ
くして北条常陸助氏綱の二男を養子ふして千葉次郎と号を改ハ男
本書系図或人へ見せ作ふ右の如ク此四流を記しおくらる
○おて此町元和の比市城より鬼門ふ当る故ふ此方迫方迫を此所ふ移れ

毎日鶴を弓を射せしむ寛永年中寛門の東殿の建立有て此
弓組他所へ移されしより故ふ此弓町と称せり

○山石川鶴橋元禄の初常憲院様上野に仏参の時（松尾芭蕉こゝに石川に殿（御殿）刻あり上野へ御参詣の道筋あり）
鶴一羽御駕籠の側へ舞来りを見せらせられて因出度為祝儀放し給ふ
ら御付此鶴を稲田氏と此鶴橋ふ常ふ拵ひ有り毎日人参として此田付を
をはさる今日さを稲田と云生今日ハ石川と云生ひと日しこんして
ハ此鶴ふ石川の鶴橋の名ハ此鶴を鶴橋と云此界以後ハ此鶴も行方なく
飛さりは田右見ふ死ぬ此後
り遠ふ云ふ（松尾芭蕉の句の物語也）
ハ元是説是なるべん

○大塚右田道灌右田の家ふ所ふ根畑を上る山塚もれろ〜を拵ふ築ふ塚ある田
（松尾ふ此和二年吉野ふ歌焼ふより塚を掘穿ち平地とあを帝塚内より石碑文字彫刻より
此塚ハ浅草日蓮宗法伝寺境内あり（九代石碑）法伝寺ハ此田退て右の家ふ彫刻文字ふ
ていハ此文ハ浅草ハ不動ハ市入ふ此ふ此ふ此ふ只今安長家屋敷家の方ふ池あり両天ふ
らんと欲せる時ハ雪ふて又せがもの方あり方立ふ此所ふて双方の方あり合せる

ふ立雲と小名ふ中習へハ左今浅草と称せる田此所の古老の物語之

○牛込横町古老云昔ハ大木の板有橋ふ号ふ是ハ古来強盗流の田
中橋ふ

○姿見橋　大猷公辺ハ鷹野の節此橋ふて休ふ是橋の名ふ辺ハ御殿の
姿見ふ名ふ也（此橋ふ）ふ
姿見と中へしふ　上意のふ
ふ稲田の古老の物語之

右五家の説近藤氏

右家の田横町強盗流の説是今ふ酒井家屋敷の内ふも古家ふて有の流
ふ中橋ふ又屋敷の不ハ先の組屋敷牛込ふ所ふ二番の横町ふ小坂ふ組へ
の入口此坂を昔ハ脇の坂と称し此坂ふ所ふ田地を越服部への流ふ
他へ出ふ当時此坂ふ名ハ坂ハ脇坂ハ西ふ方ふ入ふ此坂も故ふ名
○山吹の里此田地ハ昔時右田道灌の両奥を名きしとき幾女の古歌を引て碑
ふ名ふ此田ふ名ふ所ふ字田名ふ此所ふ

と云り〜四〜先年所の者ふ道に沿ひ後ト号ふ或人の説る只今宮田馬
場の辺より溝に橋へ多の事と百姓家ありと云又或人の説ふ古鮮川と云川
ありて当時穴八幡宮ありしを鳴田村宮田りを流れて山川ありと云只今は古
川と古名ふ唱ふ川筋なり
前編ふ記せる鎌倉御道四筋ふより只今大久保百人組の本戸より西の方に大木の板橋
此外古御道の筋の一里塚と号ふ所一つ〜ふよし
○谷中三浦坂の上日蓮山瑞雲寺開延山三十二世日寛上人此寺に
退隠を上人自載る所の梅樹宮殿三十四年十月廿六日三十三回忌之刻花咲
今ふ多と例年花開ふ事所に梅と称す
碑ふ云享保元辛酉年十二月廿日建
○白鳥ヶ池當時江戸川中の橋の北ヶ西流の所ふ往古大なる池ありて白鳥の池と号
そ埋もれも今池当の方久永氏の宅地ふのこと
○同白ヶ稲荷ふ紫の小上水の橋を駒橋と称を只今水神の宮と称ふ此川の称
を和ふ多ふ古ハ駒塚と云塚ふ作ふ云古ハ多より白多の石馬也ふ田刈を塚と
或ハ右大将家の時の事ふ多ふ右ふ塚て不を自白ふ称ふ多と
○市谷八幡舊地市谷古き書ふ市買ふ作ふ
市谷御門の内當時大番所の北の方向角ふ本氏のやしきに隅ふ大木の板橋ふ
所元官舎の跡ふ寛永年中迄庭の由今ふ動ふ此橋を神木と称ふ多ふ
〜多り
○加茂氏部豊前守殿多ふ程所ふ雨のやとりと云書ふ
○石原浅間明神社 新堀大橋ふ所古事の本社の跡ふ
○中ノ〜牛面の内上宮古事家殊ふ宮殿ふ
○法恩寺始ハ本住寺と云ふ田方ふ資ふ亡父古田宮ノ〜浅ふ原法ふ法恩
寺日恩菩提の為ふ或ハ三田村の内を此ふ寺所を開て法恩寺と号ふ
此寺平所ふ移り辛所ふ谷中ノ移元禄の始当所ノ〜ふ
○牛田薬師堂は迦古の閻魔法服ふ画虎の絵を奉ふ絵馬ふ多ふ角田川ふ近ふ昭村ふ
の池

宰府 宰府天満宮由来記

正徳之年丙戌菜畑左宰府社殿菅原右丹菌裔大宰府 信祐 盛秋の雲菅原

十ヵ年学ふ所 森の木枝この郎

とふ歌ありて宰府に有之菅原地ふりて寛文年丑年宰府有て当府方一里の地を新ふ開き名を地名

仍樟氏の藤氏(初て同二年寅年社地を給ふ同之癸卯年神殿新造新宮

迄り樟心の地宰府ふ此年八月条礼神輿を儀式此を宰府之例式ふ倣

て社殿地を巡行を国主辛亥夏信祐上京七月大内新院 上皇宮へ参

内此年迄く縁起をよむ 慶感 行て女出家ふ和〜法名を下〜

同月廿五の法此尾法名より学ふ 延宝五年乙巳年二月十

二日幕下御参詣序ふ入御 上院 文殿行り宰相之丁酉年九月

十日幕下入御 同五庚子年十月廿 御成此殿造営 成就

神宮 天国之志力

宝暦二壬申三月開帳 落慶奉尊 始祖信祐二代信改三代信

欽 四代信隆

相州鎌根金陽山早雲寺 什物

北条家分限帳之内に江戸四万と称之分

南 上平川 下平川 桜田 国府方

阿左布 坂〜谷 大船京 国府本村

下渋谷 三田 新倉 鶴 三田之〜

小川南北 馬込 世田谷 川崎 高沢

古郷 大田川京 大井 前地 泉村

西 牛込 大和領 小日向 領之奥は加賀也 渋谷

中新居 千駄谷 小石川 鞍司谷

富塚 京宿 市ヶ谷 石京 板橋

板橋ノ内
大谷々　志村　徐谷　宮田　葛谷
樋心　土志田　北谷方　戸塚ノ内　心中分
金谷
下谷　河島　市々　駒込　芝崎
多越村　廣沢　代心　根津　平イ　赤塚
神田内　新堀谷　中栗　新堀　箕輪寺屋　平塚之内
西原　田端五家　三川島　石濱　豊島郡ノ川
十条　江古田　尾久　上野　金杉
千束　石神井内　谷原五家　二戸分
阿佐谷　池袋　梶原堀内
葛西と称セラル　遠心阿立郷　葛西立城跡御免
金町　小岩　飯塚　奥戸　猪候
上平井　東ノ江　西小松川

平井郷　木毛川　堀切　梨郷
堀内　五原一百　浜江　世島之堀
○浅草寺家　四拾貫九百文　浅草
之子領
弐拾貫八拾文　下平川ニ伏ス
三貫　六百文　上平川ニ伏ス
三貫百八拾文　牛込之内ニ伏ス
以上弐拾八貫八百六拾文
○江戸石濱金不領　千葉ニ見
江戸　遠山丹後守　西那中那　江戸四ツ
知行不　北金那　葛西
都合弐〆四拾八貫四百三拾五文
小日向　弥右衛門

勅指銭貫八百四拾文　小日向彈正屋敷
興津加賀守
江戸屋　勅指六貫弐百拾六文
長谷　小日向
橋田
橋本日向守

五拾寸貫文　六々之内　新井宿

右奥書
既ニ云

金湯山早雲禅寺現住　大英方代
天文五年　癸子　秋　十五日
此本帳有之歟ニ高宝院
武州豊島郡若一王子宮別當
元禄五年壬申四月日写之　金輪寺住宣相

大道寺友山の著述せし義務集ふもとゝる事跡を記せる橋永次の行ふ
せし事の法あるとゝふ書ゝ
一岩淵夜話別集　大道寺友山武州豊島郡岩淵の
高倉ゝ著述之由
神田江戸氏元弁ゝ云ゝ此田畑ゝそ八百石許の由費のかゝる由自慢
被申の事尤業中伝ふ

○人見又兵衛　友元嫡子　桃源ト称ス
云伝ふ今世西の丸御書院の古樹を端人桃とゝふ元ハ是ハ人ゝあの
ふ所ゝ故ゝ名の門の桃ゝとそ
○御書院古弁度樹ハ慶長ハ造営ゝ付京都大工弁慶ハ作ゝふ伝る
ゝ名ゝとゝふゝの古来より伝ふ
○吉光造ゝ云来代ゝ紅葉山御宮の後ふ唐銅の多石ゝ立る稲荷の社一ケ所
此造営ハ是ハ元禄ゝ田道濱ゝ造ゝる社ゝ今中高橋の外北の方を勅定所と
二ノ丸の内ふ有ゝ此内城夢結ゝ付ゝ移ゝ由
○元孫三年ゝ平川の地ゝ市場ゝ移ゝ平川ゝ源馬寺浄土宗ゝ云ゝ元ハ入国

遠山おとしなども此地にありしと事跡ありし

○奥州道移毛池より西の丘下を通て市野毛を橋場町を北へ引れ
伊勢町 昔市場と号 を通り浅草寺へ出る 古三谷古陽田川と
いふこと詳なる事なし

○常盤橋 俗名八大橋といふ 町年寄 高橋作左衛門 道路名一覧

金葉集 古歌の縁の詞

色々に移ふ秋の木の葉かな 東路の常盤の橋ふるく成浪

常盤橋の辺江の名所の由

○江戸上宿人足問屋

台屋弥兵衛 知八郎の口銭の角小任を
浅草今の伊馬町寺十間に移す

下宿問屋

馬込勘ヶ由 四郎 四郎

佐久右平八 山東元孫ゝ此浅草弟

豊後
馬込在家覚
改四年壬子新絵ス

馬借問屋

宮部又四郎 小伝馬町

○加賀町谷を平四郎谷といふ 諸紀とも明暦大火ともふ実は解ふ今ふ東橋す

○下谷忍岡弁天台家の寺ハ東大寺の向ふ行り三鶯院と以宝永年中と
養玉院ト号を二月八日 遍照像を見る 大幅なる南光坊の撰行り 右梅嶺永
次 芝泉岳寺 墓あり 芝ふハ梅嶺三郎左衛門 其三郎 仏之ト称ス 父子紀録者之
遺候著又 紫一本ニ

○日蓮宗法麻布のうち 古本ふ小ち南の谷也南の日ヶ能坂日南と云世の人そ
よ 死ます日ふ 法ふ

○僧司谷鐘の銘ニ僧司谷と行り 本のちハ法用ち 京光僧の中新ちる寺ハ東陽
坊寺堂より西ふ鬼子母神の社行り 茅屋行り 且七月十六日 祭堂
のふ毎年相撲行る 近江の百姓集り角力無沙汰なる
○西川家ニ一流行り 浅谷祥雲寺の書ち此家と行り 此地ふ書 弾の筒を掘出

し[illegible]ふ[illegible]号[illegible]年[illegible]波川と有と祥雲寺の任持寺祥雲を[illegible]め
[illegible]
○江戸川の水流今の水道橋の上方より飯田町の下北沢名板橋ふうまで即今の一ツ
橋今少南の流れを白堀河沈河流所と称し水源是別平川と云ひ川之主川
の北の堤に防家茂沢の書ち神田の日輪寺と云一字ツ只今の三ノ丸九良お曲
今松平右京大夫屋敷の乾の角の地を梅寺を神田明神也ふ弾正古老云平河
一ツを隔て今の三の丸い江戸の江口輪寺の方ハ神田の[illegible]ふ神田々豊崎村
北豊[illegible]ふ神田今の社地の田名篠崎と[illegible]
○和歌考巻四通さうさ井寺ハ地通して一二三四五の橋を掛通ふかさ[illegible]めら
[illegible]い台徳公の御代元和ヶ寛永五六年この頃織
○八町堀と云ハ汐入の池　台徳公御代寛永年中三代出舟通用のあ
長サ八町ヶ堀通されし
○汐見観音江ハ谷戒行谷寺ハ家重勢心宗成院

嵐山流光人未驚　牛山出世振梵声　虎狼野干気縱横
兎角方便誘群情　龍宮高処声華鯨　蛇室睡破覚心生
馬腹変聖　成　羊鹿牛車休復東　猿啼霜降月色清
鶏入未唱客先行　狗不夜吠三舎城　猪鰐金山轉嶸崢

紫一本全六巻

跋ふ云

此紫の一本八橋田ふ伝し光融入道家号の比叡有て表集光　都とハか書ちと
方て来ふ伝し[illegible]を[illegible]書を
天和三年癸亥季夏　月　遺俟入道判

凡考ル二江戸近辺の在名を称号武士ハ先武ハ世多ケ谷吉良ハ家系ふ云是則義
氏の末男長氏其ヶ義継始て三州吉良東条と任吉良と称し夫より十代の孫成
高是則将軍ヨリ武州世田ヶ谷お所ヶ荒田を賜り其子ヶ衛佐孫其子ヶ衛氏
勢ヶ勢ヶ地ふ居住を[illegible]ふ天正十八年山田京陣ニ領地没収神君和勢
国十九年上総ふおいて[illegible]名地を賜ヶ[illegible]ヶ代ふ伊ヶ田吉良ハ一人のふ

この名称より後台命始薄田と改名御位と号を今ふる孫連綿うり是より
世田ヶ谷と古象古墳事蹟中伝ふ田又豊島氏ハ平氏をおふ記をもく豊島村の
産あり板橋と称せるハ豊島より別れて武州板橋ふ居住して称号せるより家の後
ハ九の内ハ三ハ家を用ひ家伝ふ始て板橋ふ移り此家紋三彩をけるふよりて源
家紋こしのより常伝ハ九の内ふ心形を用ふ其家三彩の異のようこ小川氏ハ今
川治部を輔生ハ是小川富居を頃資新宮命高久出生こ分て西川を以家名ふ
せるより（母ハ北条氏康女）牛込氏ハ藤原姓秀郷の流より家伝曰秀郷より代重俊
上州大胡ふ住を大胡左衛と号を重俊より十代を孫大胡太郎重治初て武州牛
込ふ移り居を重治官内少輔（法名宗泉）勝行牛込官内少輔（従五位下）
之牛込を称号を○家伝ふ云重治大胡官内少輔（法名宗泉）勝行牛込官内少輔（従五位下）
屋住北条氏康時を帰干書状ふ曰を領武州牛込ヲ并今井横田日尾谷其外ト
総ふ城郭ふ業居住干牛込居を天文二十四年正月六日達干氏康以改大湖
氏為牛込旦於武州牛込曽日建立一寺宗泰寺寄附美田十石之地天正十五年

七月廿九日卒行年七十五法名清雲

○当時雲居山宗泰寺碑銘　但一基合セ記ス

（当天正十五丁亥年七月廿九日）

泰秀院殿前牛込大守従五位下外心清雲庵主

（天文十二癸卯年）

雲居院殿前大湖大守實翁宗泰大庵主

左ノ方

大湖宮内少輔藤原朝臣重行者住上州大湖城鎮守武蔵守秀郷朝臣後胤

大湖重俊十代嫡孫也移武州牛込之城　七十八歳卒

右ノ方

従五位下宮内少輔藤原朝臣勝行者重行嫡男也武州住牛込之城天文

十二甲辰年造雲居山宗泰寺寄美田十斛之所天文十四乙卯年改大湖

氏号牛込矣　八十五歳卒

右宮内少輔勝行子牛込彦三郎（後改三郎左衛門）北条氏政直任天正十二年九月十八日

繼家督此時氏直賜家督相續之手書同十八年北条家滅亡同十九年始
奉詳謁　神君則奉仕之以後子孫綿〻相考ルニ碑ノ銘天文十二年ニ非ス癸卯己同十四年ハ乙卯ニアタラス

寛政二年庚戌十一月十九日以瀬名氏本書寫畢猶以好
本可校合也

南畝書